二次元ぷち文庫
試し読み版
お嬢様の
花嫁修業
上田ながの
表紙イラスト：トイト

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『お嬢様の花嫁修業』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

お嬢様の
花嫁修業
上田ながの
表紙／トイト
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

奥宮空（おくみやそら）

二人が通う私立奥宮学園経営者の孫である、生粋のお嬢様。
綺麗な黒髪に、流麗な鼻梁が美しい日本人形を思わせる美少女だが、胸やブレザーを押し上げるほど量感豊かで、同年代女子に比べ、魅力的なスタイルを有している。

久津川陽樹（くつかわはるき）

空の幼馴染みで、密かに想いを寄せている。彼女の事を第一に考えており、結婚の話を聞いてからは、自らの気持ちは抑え、彼女の“花嫁修業”に協力をする。

「あの……は、陽樹……ちょっといい？」

放課後――久津川陽樹が机の中の教科書やらなんやらを、ああ今日も宿題が沢山出たな、しかも僕が苦手な数学に物理って、嫌がらせかよぉ……なんて考えながら学校指定カバンに詰めていると、風に揺らされる風鈴のような美しい音色の声が投げかけられた。

「え？　あ……空か」

振り返ると背後には、前髪をぱっつんと切り揃えた美しい黒髪を背中まで伸ばした少女が立っていた。

クリクリとした瞳に、流麗なラインを描く鼻梁が美しい少女。髪型と合わせて見るとまるで日本人形のようにも見える。しかし、日本人形と言うには、その身体付きはあまりに豊かだ。

学校指定のブレザー制服。その胸元は、制服の上からでもはっきりとツンッと上向き加減の乳房の形が想像できるくらいに膨らんでいる。呼吸に合わせて前後する様は、見慣れていても正直僕みたいな健康な男の子には目の毒ですってくらいに艶めかしい。同年代の少女と比べても明らかに大きな乳房だ。そんな胸元からキュッと引き締まる括れ、プリッと張りのあるヒップにかけて描かれる艶めかしいラインは、制服を身に着けていても男の子には目の毒だった。スカートから伸びる太股はムッチリと膨らんでいる。きめ細やかな白い肌がなんだか眩しかった。

私立奥宮学園高等部二年松組所属、奥宮空――それがこの少女の名前である。

名字を見れば想像がつくと思うが、奥宮学園は空の祖父が経営する学園だ。奥宮家は日本でも有数の名家である。つまり空はお嬢様というわけだ。

そんなお嬢様と陽樹は幼稚園時代からずっと同じクラスに所属している。いや、ただのクラスメートじゃない。いつも一緒にいる間柄って奴だ。

授業で二人組を作れと言われれば必ず組み、一緒に給食を食べ、登下校も一緒にする。どちらかの家に真っ直ぐ帰るということはせず、必ずどちらかの家に寄り、やはり二人で宿題を終わらせる。その後はゲームをしたり、夕飯を食べたり、昔はお風呂にも入ったりしていた。幼馴染みという言い方が一番分かり易いだろうか。多分、本物の兄弟よりも一緒にいる時間が長いと思う。

「えっと、な、なにか用？」

なのに、なのにだ！　空の姿を見ると、それだけで緊張してきてしまう。普通に会話するだけだってのに、顔が熱くなり、心臓がばくばくと激しく脈打つ。視線が泳ぎ、口内が渇いた。ゴクッと喉を鳴らしてしまう。

こうなってしまった原因は一体――な～んてことは、正直考えるまでもない。つまりは好きだからだ。幼馴染み同士なんて関係じゃ満足できないくらい、空のことが好きなのだ。

ただ、だからといって告白はしていない。というかできるはずがない。だってもし告白

をして断られでもしたら……。多分今のような関係に戻ることはできないだろう。もう一緒にはいられない。そんなの耐えられるはずがなかった。そう、だからこそ、今のままの関係が一番なんだ――と、自分に言い聞かせる。

「ちょっと、陽樹に話したいことがあって……」

こちらの葛藤を知ってか知らずか、もじもじと遠慮がちに口を開く。箱入り娘として育てられてきた為だろうか？　昔から空にはどこか引っ込み思案なところがあった。

（でも話したいことってなんだろう？）

改めてこんなことを空が言ってくるなんて、今まで覚えがないぞ。

（いや、もしかして……）

そこで考える。まさか……まさかとは思うけど、こ、告白とか？

「えっと、話？　相談かなにか？　な、なな、なんでも話してよ」

まさか、そんなことは流石にあり得ないだろ――とは思うのだけれど、一度意識してしまうとなんだか緊張してしまう。胸の鼓動が太鼓の乱れ打ちかってくらいに、より激しいものへと変わっていった。

「えっと……ここだとあれだから……陽樹の家でもいい？」

「あ、も、勿論（もちろん）だよ！」

家で告白？　それって場合によってはそのまま……。なんて駄目だ駄目だ！　変なこと

は考えるな。悩んでる空に対して失礼だろ!!　などということを考えながら、二人で並んで下校した。

「……実はね」

自室にて、烏龍茶が淹れられたコップが置かれたテーブルを挟んで向かい合うと、早速空は口を開いた。因みに烏龍茶を淹れたのは、両親が揃って半年間程北海道に出張している為、陽樹自身である。

「……」

ただ、その後がなかなか続かない。緊張したような、迷ったような表情を浮かべ、空は視線を室内に泳がせる。

「ごめんなさい。その、なんて言ったらいいか分からなくて」

そんな自分の沈黙に申し訳なさを感じたらしく、頭まで下げてきた。

「別にいいって、僕と空の仲だろ。その……話せないならまた今度でもいいよ。僕はいつだって相談に乗るからさ」

どうやらというか、やはり妄想したような相談内容ではなさそうだ、ということに多少は落胆しながらも、明るく声をかけてみせる。本心からの言葉だ。

「取り敢えず宿題でもしようか」

そう言いながらカバンに手をかける。気分を変えるのも悪くないと思ったからだ。
「待って……。その、は、話すから……」
こちらに向けられる視線は真剣だった。
「……えっと、分かった」
頷きながら居住まいを正す。
「実はね……」
先程と同じ言葉を発すると共に、スウッと空は大きく息を吸った。
「私……結婚することになったの」
「……」
え？　い、今なんて言った？　えっと、なにか聞き間違いでもしただろうか？
「陽樹？」
小首を傾げる。うん、そんな仕草もやっぱり可愛いな。
「あ、えっと……その、ちょっと聞こえなくて、も、もう一度いいかな？」
きっと聞き間違いだ。そうだ、そうに違いない！　自分に言い聞かせながらパードゥンする。
「その……結婚することになったの」
ああ、やっぱり間違いじゃなかったんだ……。

頭がクラクラする。目の前が真っ白になりそうだった。天地がひっくり返るって、こ、こういうことを言うんだなぁ、なんて妙な納得までしてしまう。
「だ、大丈夫？」
「え？　も、勿論だ、だだ、大丈夫だよ。へ、へへへ、へぇ～。そ、そそそ、そうなんだ。結婚。結婚かぁ……。で、あ、あああ、あい、相手はだだ、誰なの？　ってか、つつ、付き合ってる相手がい、いたんだ……」
動揺を表に出してはいけない。平静を装え、なんでもないって態度で接するんだ。
「その……別につ、付き合ってる相手がいるわけじゃないの」
「そ、そうなんだ。でも、そういうことってあるよね。あるある」
にこにこ笑いながら何度も頷いてみせる――って、え？
「つ、付き合ってるわけじゃないの？」
「そう」
「え？　でも、それってど、どういうこと？」
訳が分からない。頭がこんがらがってしまいそうだった。
「その……い、許嫁ができたの」
「なるほど」
な～んだ、そういうことか。許嫁。許嫁ね……。そうだよな、空はお嬢様なんだからそ

れくらいのことあるある。
ああ、でも良かった。付き合ってる相手はいないんだ。つまりそれって、まだ僕にもチャンスが――。
（って、変わらないよな……）
はぁっと溜め息が漏れてしまう。
「あ、その……やっぱりこんなこと話してめ、迷惑だった？　ごめんね」
当然溜め息は空にも聞かれてしまった。申し訳なさそうな表情を浮かべて謝罪してくる。
「いや、いやいや、め、迷惑なんてことはないよ。そっか、許嫁か……えっと、こ、こういう場合って、お、おめでとうでいいのかな？」
空が悲しそうな表情を浮かべると胸が痛むので、慌てて誤魔化しの言葉を向けた。この時、幼馴染みは僅(わず)かに眉間に皺を寄せ、どこか悲しそうな表情を浮かべたけれど、それに気付く余裕は正直なかった。
「あ、ありがとう……」
礼を言いながらも俯くが、すぐにまた空は顔を上げる。
「あの……それでね、ちょっと相談したいことがあるの」
「相談？　えっと、な、なにを？」
正直言うと頭の中では、

（空が結婚。空が結婚。空が結婚。空が空が空が空が空が……結婚結婚結婚結婚……）

なんて言葉がひたすら渦を巻いている。なにかを相談されたところで、まともな返答などできそうになかったが、それでも空の言葉を無下にすることはできなかった。

分かってる。どんなにいいところを見せたって、もう空は本当のお空みたいに手が届かない存在になってしまったってことくらい。でも、だからって幼馴染みとして、し……〝親友〟……として、悩んでいる彼女を放っておくことはできなかった。

「その、わ、私のは……」

「は？」

「はな……花嫁修業の手伝いをしてもらいたいの！」

「――へ？」

それは、どんな悩みだって力になってみせる――という決意が、一瞬吹き飛ぶくらい、訳の分からない相談だった。

「は、花嫁修業？　ぼ、僕が手伝い？　え？　でも、い、一体なにを？」

さっぱり分からず首を傾げる。

はっきり言うが空は花嫁修業なんか必要がない人間だ。お嬢様だというのに、昔から家の手伝いをよくする少女で、掃除や料理、裁縫などなど、多分その辺の女子よりも、引っ込み思案な性格さえ除けば、遥かに生活能力は高い。

今更なにが必要だというのだ？　しかも、自分が手伝うようなことが……。
「その、あのね……」
不思議がって首を傾げていると、顔を真っ赤にし、これまで以上にどこかもじもじとしながら、恥ずかしそうに空は口を開く。
「こ、子作り……」
「――な、なに？」
今なんて言った？　子作り？　ま、まさか、聞き間違いだろ。なんて考えながら、聞き返す。
「だから……子作り……。せ、セックスの修業を手伝って欲しいの‼」
だが、聞き間違いなどではなかった。顔を真っ赤にし、部屋中に空は恥ずかしいセリフを響かせる。
「せ、セックスって……ど……どうしてまた、そ、そんなこと……」
自然視線を空の身体へと向けてしまう。膨らむ胸元や、制服から覗き見える首筋を見て思わず息をのみ――そうになったところで、駄目だ駄目だと自分に言い聞かせ、視線を顔を真っ赤に染めた空へと移した。
「どうしてってその……。わ、私はお、奥宮の人間だから……」
「そ、それは知ってるけど……。だからそれと、せ、せ、セックスがどう関係を？」
「……つ、つまりね」

僅かに逡巡を見せた後、深呼吸して口を開く。
「その……奥宮の人間として、は、恥ずかしいところを見せたくないの。それがどんなことであったとしても」
見つめているだけで吸い込まれそうになるような、黒い、宝石のような瞳を真っ直ぐ向けてくる。
（そういえば……空ってこうだったよな）
昔から何事でも自分よりも家を――奥宮空という個人ではなく、奥宮の人間であるということを優先させていた。自分の行動で奥宮に迷惑をかけてはいけない。そんな責任感を持っていた。
「お願い……。駄目？」
「だ、駄目って……そ、そう言われても……」
はっきり言うとしたい。どんな形であれ、空とセックスしたくないはずがなかった。それでも、やっぱりこんな形はいけない――そう思う自分がいる。
「その……陽樹が迷う気持ちも分かるわ。わ、私がとんでもないことをお願いしてるってことも理解してる。だけど……こういうことをするなら、は、陽樹とが……いいの。だから、お願い」
上目遣いでこちらを見つめてきた。反則的なくらい可愛い。

「陽樹に断られたら、イヤだけど他の誰かに頼まないといけないの。それでも……駄目？」
「ほ、他の誰か……」
脳裏に見ず知らずの男に抱かれる空の姿が思い浮かぶ。想像しただけで万力で締め付けられるみたいな痛みを胸に覚えた。絶対にイヤだ。考えたくもない。
「……わ、分かったよ。僕が手伝う。空の花嫁修業を手伝うよ」
空を見つめ返し、はっきりと頷いた。

＊

「そ、それじゃあ、ま、まずはどうしようか……」
決心は下した。ただ、だからといって何をすればいいのか分からない。なにしろ自分は生まれてこの方一度も女子と付き合ったことがないのだ。当然童貞です！
「そ、その……えっと……」
とはいえ、空も同様だ。彼女だって今まで誰とも付き合ったことはない。幼馴染みであり、四六時中いつも彼女と一緒にいた陽樹にはそれがよく分かっている。俯き加減で恥ずかしがりながら、なにかを必死に考えるような素振りを見せた。
「あ、そうだ！」
やがて空は声を上げる。もしこれが某ゲームなら、ピコーンッと電球みたいな閃きマークが頭の上に灯っていたことだろう。

クチュクチュと舌先で乳首を転がすと、空はより激しく肉体を震わせる。
「気持ちいい？」
「そ、そんなの分かんない……」
顔を真っ赤にしながら首を横に振る姿が可愛い。もっとこんな姿が見たかった。だから舐めるだけではなく、乳房を咥え、吸う。
ちゅじゅっ、ちゅうちゅちう。
「そ、そんなの赤ちゃんみたい……だ、駄目だよ……あっ、んっ、あんっ」
淫靡（いんび）な音を奏でながら乳首を吸うたびに、空は身をくねらせ、開いた小さな口からは甘い嬌声（きょうせい）を漏らした。
（こ、こんなの我慢できない）
この状況により興奮が高まっていく。胸を愛撫するだけでは我慢できそうになかった。
「こ、こっちもいい？」
手を下半身へと伸ばす。
「そ、そっちは……」
驚いたような表情を浮かべ、空は硬直した。
「……」
一瞬の沈黙が室内を支配する――が、

こっちシーン試し読み
ここからスタート！

「い、いいよ」
やがて空は声を震わせながらも頷いた。
「……そ、それじゃあいくね」
一度乳房から唇を離すと、ベッドに仰向けに寝転がる幼馴染みのスカートに手をかける。そっと捲り上げると、ブラジャーと同じ白いレースのショーツが露わになった。
「は、恥ずかしいから、あんまり見ないで……」
か細い声が耳に届くけれど、頭の中には入ってこない。初めて見る同年代の少女の下着から目を離すことができなかった。
「そ、それじゃあ、ぬ、脱がすね」
ドキドキと胸が鳴る。まるで炎天下の中全力で走った後みたいにカラカラに渇いた喉を、何度もゴクリッと鳴らす。
頭の血管が破裂してしまうのではないかと思うくらいの熱を感じながら、そっとショーツを下ろした。
（こ、これが……空の……）
ずっと夢見てきた幼馴染みの秘部が露わになる。
薄めの黒い陰毛に隠された秘裂が、陽樹の視界に映り込んだ。キスや乳房への愛撫で興奮した為だろうか？　僅かに左右に開いている。鮮やかなピンク色をした肉襞が覗き見え

た。
「き、綺麗だ」
思わず呟く。別にお世辞を言っているわけじゃない。心の底からそう思った。
「恥ずかしい」
「恥ずかしくなんかないよ。本当に綺麗なんだから、空のここ……」
語りながら手を伸ばし、秘裂に指を添えた。
クチュッ。
「はんっ」
触れた途端、指先に湿った感触が伝わってくる。
「あ、ぬ、濡れてる……」
視線を向けると、指先にはニチャッと濃厚な体液が絡みついていた。
「嘘……そ、そんな嘘つかないで」
「嘘なんかついてないよ。ほら」
くちゅっくちゅっくちゅっ！
再び指を添え、秘裂をなぞるように動かした。
「あっ、んあっ……。ぬ、濡れてなんか——んっんっんっ、駄目。なんかそれ、ぴ、ピリピリする。あっあっあっ」

胸よりも敏感らしく、少し愛撫するだけで先程よりも甲高い吐息を漏らす。ジュワリッと内側から溢れ出すように、愛液が滲(にじ)み出てきた。

秘裂もクパッと左右に開いていき、ピンク色の花弁がより鮮明になっていく。愛液に塗(まみ)れた肉襞が呼吸に合わせるように蠢(うごめ)き、膣口が小さく口を開くのが見えた。

「すごい。これが空の……お、おまんこなんだ……」

「や、やだ。そ、そんな言い方しないで」

空が恥ずかしそうに首を横に振ると、それに合わせるように蜜壷からは更に愛液が溢れ出す。淫靡すぎる姿だった。

「も、もう耐えられない」

下腹部が熱くなる。ペニスがより硬く、猛々しく屹立していった。

自分でベルトを外し、ズボンを、下着を下ろす。解放された肉竿が、ビョンッと勢いよく飛び出した。

「そ、それが……陽樹の……お、大きい……」

熱に浮かされたような視線を、こちらの下半身へと向けてくる。

「昔と全然違う……」

「そ、そうかな？」

「そうよ。すごく大きい……。ほ、本当にそんなのが挿入(はい)るの……？」

驚いたような表情で見られているだけで、ビクビクッとペニスは震えた。すぐにでも射精てしまいそうなくらいに、下腹部が熱を持つ。
「い、挿入れていい？」
はぁはぁと息を吐きながら、真っ直ぐ幼馴染みを見つめて問う。
「……い、挿入れて……いいよ」
少し迷いを見せたし、声も小さかったけれど、はっきり頷いてくれた。
「そ、それじゃあいくね」
肉先を秘部に添える。
ぬちゅうっ。
「あっ……はぁはぁ……当たってる。すごく熱い」
「空のここも、熱くなってるよ」
亀頭に蜜壷の熱気が伝わってきた。発熱でもしているかのように、陰部は熱く火照っている。ニチャッと肉襞がペニスに絡みついてくるのを感じた。心地いい媚肉の感触――そんなものを感じながら、腰を突き出す。
ずじゅっ、くちゅるっ！
「は、挿入ってきた。んっ、んあっ！　お、大きいのがわ、私の膣中に……」
愛液に塗れた蜜壷に肉竿が沈み込んでいく。ヌルッとした肉壁がペニスに絡みついてく

るのを感じた。襞の一枚一枚が竿を締め付けてくる感触は、下半身が蕩けてしまうのではないかと錯覚を覚える程だった。

「す、すごく熱くて、大きい……はぁっはぁっはぁっ……」

切なげに眉根に皺が寄る。

「大丈夫？　い、痛くない？」

「うん。だ、大丈夫……だか、ら……も、もっとい……挿入れていいよ。でも、もう少しだけ……んふっ……はぁ……や、優しくしてね」

多分痛みは感じているのだろうけれど、空は笑顔を向けてくれた。

「分かった。優しくするね」

絡みつく肉襞の感触が心地よく、正直このまま容赦なく腰を突き出したいという欲求も覚えたけれど、それを抑え込んでゆっくりと腰を進めていく。

「あっあっあっあっ！　わ、私の膣中が……は、陽樹ので……は、陽樹のお、おちんちんでい、いっぱいに……はぁはぁ……なってく……んっふぅ」

身体が一つに繋がっていく。結合部からは挿入の圧力で愛液が溢れ出した。そして――。

ブヂッブヂブヂブヂイッ!!

「んっふ！　ひっぎ、んぎぃっ！　あ、い、いたっい……」

遂に肉棒は膣奥にまで辿り着く。破瓜の血が一筋、膣口から流れ落ちていった。

「お、奥まで挿入(はい)ったよ。痛い？」
収縮する肉壁によってペニスが押し潰されてしまうのではないかという錯覚さえ覚えながら、優しく空の頭を撫でた。繋がり合っているのだと考えると、これまで以上に愛おしさが溢れ出す。
「だ、大丈夫よ。ちょ、ちょっとは痛いけど……ひっ、くふっ……私はだ、大丈夫だから。し、心配しないで」
苦しそうな表情を浮かべつつも、空は口元に微笑を浮かべる。
「そ、空！」
我慢できなかった。
ちゅくっ、ちゅっちゅっちゅっちゅっ、くちゅぅ。
「は、はる――んふっ、ふっ、ふむぅ」
感情が赴くままに唇に唇を重ね合わせる。舌を挿し込み、口腔を貪った。舌と舌を絡ませ、唾液を交換し合う。下半身と唇だけじゃない。全身が一つに繋がり合うような性感を覚えた。
「んっふ……んはぁ……はぁはぁ……う、動いていいよ」
重なり合っていた唇を離すと、空は僅かに潤んだ瞳をこちらに向け、囁(ささや)くように口を開いた。

「分かった。いくね」
幼馴染みの想いを受け、ゆっくりと膣奥まで挿し込んだ肉棒を引き抜いていった。
「ふあっ……んん」
ビクンッと震える空。
「も、もしかして痛かった？」
「う、ううん。だ、大丈夫。私は大丈夫だから……。その、な、膣中(なか)で動いたから、ちょっと驚いちゃった」
てへへっと恥ずかしそうに笑う。一つ一つの仕草、表情が愛おしさを更に倍増させた。
「空、空！」
「んっんっ……は、陽樹、陽樹ぃ」
感情の赴くままに名前を呼びながら優しく腰を振ると、答えるように空も名前を呼んでくれる。少し腰を振るたびに、にじゅっと膣壁が引き締まり、よりペニスを締め付けた。すぐにでも達してしまいそうなくらいの性感が身を襲うけれど、まだ射精しちゃ駄目だ、空が気持ちよくなるまで我慢するんだと自分に言い聞かせ、増幅する射精感を押さえ込む。
ぬちゃっぬちゃっぬちゃっぬちゃっ。
優しく優しくピストンを加える。
「はっ、んっく……なんか、か、身体があ、熱くなってきた」

そのお陰だろうか、しばらくすると空の眉間に寄っていた皺が消えた。代わりに吐き出す吐息にこれまで以上の熱気が混ざり始める。全身が紅潮し始め、ペニスへの肉壁の締め付けがより激しいものへと変わってきた。

「なんだか……んあっ、あふぅ……。い、痛みが引いてきたみたい。い、いいよ。も、もっと激しく動いても……んっんっんっ」

もっと激しく動いてもいいという空の言葉が本能を刺激する。

「本当にいいの？」

「うん。わ、私はだ、大丈夫……んっんっ、は、陽樹に……も、もっと……き、気持ちよくなって欲しいの。だから、う、動いて」

そういう空が浮かべたのは、とても優しく、綺麗な微笑みだった。本能を押さえ込むことなんかできるはずがない。溢れ出す感情のままに、腰を振った。

ずちゅっずちゅっずちゅっずちゅっずちゅっ！

「んあっ！　あっあっあっ、す、すごい。んっふ、あ、当たる。わ、私のお、奥に陽樹のが当た、るぅ！」

膣奥まで腰を突き込む。ズンッというピストンの動きに合わせて、空の乳房が揺れた。グラインドするたびに、膣壁の締まりがきつくなっていく。激しくなるヒダヒダの絡みつきは、子種を搾り取ろうとしているかのようだった。

腰を振るたびに下腹部からマグマのように熱い射精感が膨れあがってくる。
（でも駄目だ。ぼ、僕だけ気持ちよくなっちゃ駄目だ。空にも、空にも気持ちよくなってもらいたい。だから、我慢だ、我慢）
それを必死に押さえ込み、何度も何度も膣奥を突いた。
「あ、だっめ。なにか、なにか来る。あっあっあっ、これ、き、来ちゃう。来ちゃうよ」
そのお陰だろうか？　やがて空がそんなことを告げてきた。
「だっめ、あっあっあっ、そ、変になっちゃう。こ、こんなのおかしくなっちゃうから。も、もう少し、もう少しゆ、ゆっくり――んあっ！　おかしくなっちゃうぅ」
「いいよ。おかしくなっていいから！」
ギシッギシッギシッギシッ!!
本能で空の絶頂が近いことを悟った陽樹は。更にピストン速度を上げる。ベッドの軋んだ音が室内いっぱいに響き渡った。
そして――。
「あ、だっめ。こ、これ、く、くる！　くるくる、き、来ちゃうのぉ！　あっあっあっあぁあああっ!!」
ビクンッと空の肢体が跳ねる。同時に肉壁が更に収縮し、肉棒を締め上げてきた。膣壁が激しく痙攣（けいれん）する。

「ああ、いい。いいよぉ」

セックスをするたびに、空の肉体は敏感になっているようだった。繋がるたびに、以前よりも感じた姿を見せてくれる。自分とセックスすることで感じてくれているのだと考えると、愛おしさが湧き出してくる。

（好きだ。好きだよ空）

だが、気持ちを伝えることはできない。

この行為があくまでも花嫁修業でしかないということを改めて突き付けられ、なんだか胸が痛んだ。

その為だろうか？　常に空が自分以外の誰かにいつか抱かれる姿がちらついてしまい、想いのままに幼馴染みの肉体を抱くことはできなかった。

＊

「ほ、本当にいいの？」

「うん。して……」

駅前近くのホテルの一室、ベッドの上で全裸で四つん這いになった空が尻を突き出してくる。プリッと張りのあるヒップは、ニチャリッと湿っていた。肛門にたっぷりローションを流し込んだからだ。

『あ、アナルセックスをお、教えて……』

ここから試し読みスタート！
エロシーン

というのが今日の花嫁修業である。
『子作りには関係ないけど、お、男の人って……こういうの、好きなんでしょ？』
断れるはずなんかなかった。
尻を左右に開く。しっとりと粘液で濡れた肛門が視界に映り込んだ。周囲よりも僅かに色素が濃い窄んだ肉穴が、呼吸に合わせるように開いたり閉じたりしている。
ぬちゅっ！
「ふくぅっ！」
肉先を肛門に密着させると、ピクッと空は身体を震わせた。
「それじゃあいくね」
ずじゅっ！　ぐじゅるぅっ！
腰を突き出す。小さな肛門をペニスで押し開いていった。肉穴付近の締め付けは膣よりもきつい。ギジッという感触を感じるだけで、射精しそうなくらいに肉棒は高まっていく。
「んふっ！　お、んふあっ！　おっおっ、す、すごい。お、お尻が開いてく。おっ、んおぉっ！　大きい。お尻がさ、裂けちゃいそう」
ビクッビクッと肢体は反応を示す。
「大丈夫？　も、もう止める？」
「だ、大丈夫。はぁはぁ……わ、私はだ、大丈夫だから……い、いいよ。陽樹の好きにし

ていいよ」

「……分かった。それじゃあ挿入れるね」

より肉奥へとペニスを突き込んでいく。腸内は肛門よりも締め付けはきつくなかった。代わりに優しく咥え込んでくるかのような刺激が走る。増幅していく絶頂感。それを抑えながら、遂には根元までペニスを挿入した。

「あっふ、おっ、ふっく……。はぁっはぁっはぁっ……。か、感じる。陽樹のおちんちんの形まで、わ、分かるよ。う、動いて、動いていいよ」

「うん。動くね」

挿入しただけで我慢できるはずなんかない。空に言われるまでもなく、陽樹はピストン運動を開始した。

激しく腰を振り、何度も何度も腸奥を肉棒で叩く。ペニスで腸壁を擦り、カリ首で直腸を摩擦した。

パンッパンパンッパンッパンッ！

腰と腰がぶつかり合い、乾いた音が響き渡る。

「んっほ！　おっおっおっ、おっし、お尻も感じる。かんじっるの。んっは！　おちんちんが、わ、私のお、お尻を掻き混ぜてる。だっめ、これ、なんか身体がぴ、ピリピリする。すっぐ、すぐに絶頂っちゃいそう」

「いいよ絶頂っても。僕も射精すから。だから絶頂っていい。絶頂って！」

グラインド速度を上げていく。ジュポッジュポッと直腸内のローションを肉棒で掻き出した。お陰で下腹部が湿り、パジュンッパジュンッと腰と腰がぶつかり合う音に湿り気が混ざり始める。

「おっく、奥まで届く。お尻なのに、ふっく、ふうっふうっふうっ！　お尻なのに気持ちいい。お尻、い、いいっのぉ！　あっ、ふほぉっ！　おっおっ、も、もう、もう耐えられない。こんなの我慢できないよぉ」

「僕も！　僕ももう射精るっ!!」

限界だった。性感で蕩けそうになっているペニスを、これまで以上の勢いで腸奥に叩き付ける。刹那――。

ドビュッ！　ビュッビュッビュブルルルッ!!

開いた鈴口から、直腸に精液を流し込む。

「あ、あっつ！　おっおっ、は、はいってくっる。熱いのが、陽樹の熱いせーえきが、お尻、私の、おっおっ、おしっりに流れ込んでくる!!　これ、だっめ、き、気持ちいい。い、絶頂くッ！　私も、お、お尻の中に射精されて絶頂くぅっ!!」

腸内に広がる白濁液の熱気によって、空も絶頂に至った。キュウッと肛門が窄まり、肢体が痙攣する。ギュウッとベッドシーツを握る姿が、なんだかとても艶めかしかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/